

「無用の用」(無の効用)を考える

株式会社 開倫塾

代表取締役 林 明夫

1. はじめに

高井伸夫先生がいつも口になさり、また、このブログの表題でもあるのが「無用の用」だ。そこで今回は「無用の用」について考える。

2. 高井伸夫先生の愛読書、佐藤一斎著「言志四録」(全四卷)の第一巻「言志録」の「無用の用」は極めて示唆に富む。

『無用の用』

1. (1)世の中の物事は、自然のなりゆきでそうならざるを得ないものがある(皆、存在理由はあるのだ)。
(2)とかくすると、学問があると称する人は、あるいは人の行なう事を排斥し、「無用」物視する。
(3)そしてことに、「天下には無用の物もなければ、無用の事もない」ことを知らない。
(4)学人が排斥して、「無用」物視するものが、大いに役に立つことがある。
(5)もし、人間の衣食住に何ら役に立たないものは皆「無用」であると考えれば、天の神は、なぜ「無用」の物を数多く作ったのだろう。
(6)用材にならない草木、食用にならない鳥獣や虫魚などがある。
(7)天が果して、如何なる用途を目してこれらのものを生ぜしめたのか、人間の考えが及ばない。
(8)易経に「あごのひげをのばして儀容を飾る」とある。
(9)其の鬚も何の役に立つものであろうか。
(10)我々はそう簡単に物を考えてはいけない。自然のなりゆきというものがあるのだ。
2. (1)前条の理屈を人間の事に当てはめてみよう。
(2)一年中の仕事はさまざまであるが、これを算えてみれば十の中の七は「無用」である。
(3)ただ人は平和な時代にあつて、心を寄せるところがないと、「大学」にいう「小人は閑居して不善をなす」ことも少なくない。
(4)今の世は、貴いも賤しいも、男も女も、「無用の用」が多くて、それに引きまわされて忙しく働いているから、悪い事をしようという気持の起こることが少ないのであろう。
(5)これも「無用の用」ということであろう。
(6)思うに、太平無事な世の中では、こうならざるを得ないのも、また、自然のなりゆきである。』

以上は、佐藤一斎著、川上正光全訳注「言志四録(一)全四卷」講談社学術文庫、講談社 1978 年 8 月 10 日刊、P128～131 より引用

3. 「老子」第11章、「無用の用(無の効用)」

佐藤一斎はおそらく「老子」第11章の「無用の用」から学び、「言志四録」を執筆したと思われる。

『無用の用(無の効用)』

1. 〔題意〕

- (1) 世人は形あるものの有用性は良く知っているが、形なきもの、空虚なるものの有用性を認識しているものは少ない。
- (2) 家の屋根・柱・床などは、人を居住せしめる室の空虚な部分を形づくるためのものである。
- (3) ところが、それに気づいている者は少ない。
- (4) かく空虚な部分が真に有用であることを説き、これより連想させて、無すなわち道の有用であることを読者に悟らしめようとするのがこの章の趣旨である。
- (5) 無の有用なるを説くという意味で、「無用」とこの章に題されているのは適切。

2. 〔書き下し文〕

- (1) 三十の輻は一轂を共にす。
- (2) 其の無に當りて車の用有り。
- (3) 埴を埴して以て器を爲る。
- (4) 其の無に當りて器の用有り。
- (5) 戸牖を鑿ちて以て室を爲る。
- (6) 其の無に當りて室の用有り。
- (7) 故に有の以て利を爲すは、無の以て用を爲せばなり。

3. 〔通釈〕

はじめに(道はその存在が知られない。いわば無の如きものであるが、その働きを譬えると次のようである。)

- (1) 車輪の三十本の輻(や)は一つの轂(こしき)の空虚な部分に集中している。
- (2) その轂の空間部が軸を通しているからこそ始めて車輪はその働きをなすことが出来るのである。
- (3) 粘土をまるめて器を作る。
- (4) その器は中の空間部があればこそ物を容れるという器の働きが果たされるのである。
- (5) また戸や窓をあけて室を作るが、
- (6) 室というものは人を容れる空間部があればこそ室としての働きをなすことが出来るのである。
- (7) このような訳であるから、有すなわち存在するものが人々に利をもたらすのは、無すなわち存在しないもの隠れたるものが働きをなすからである。

おわりに(道あればこそ万物の働きも可能であり有用となってくるのである。)

4. 〔語釈〕

- (1) 三十輻「輻」は車輪の矢。河上公注によると、昔は月の日数に法(のつと)って車輪には三十本の輻を用いたという。
- (2) 共一轂「共」は同じくするの意。「轂(こしき)」は車輪の中心にあつて軸(じく)を通し、輻を

集めている部分。

(3) 埴埴「埴」は粘土。

5. 〔余説〕

(1) 老子や莊子には普通人の考えも及ばない物の見方や考え方が随所に見られる。

(2) この章の如きはその良い一例である。

(3) 道という虚無なものの存在を、一般世人は普通意識していない。

(4) それに対して、実はこれこそ最も尊いものの有用なものであるとして、器や室の例を取って合点させる。

(5) その譬喩の巧みさ、着想の奇抜さは、ちょっと他に類を見いだせない。

(6) 油絵の如く、画面一杯に絵の具を塗りつけ、いささかの余白をも残さない洋画に対して、中国の絵画は古来主材を簡潔に描くのみに留めて、余白を生かすことに苦心が払われていると聞く。

(7) こういう、いわゆる「無の芸術」の思想根拠も、かような老莊の「無の効用」の思想に由来するのではあるまいか。』

以上は、阿部吉雄・山本敏夫著「新釈漢文大系、第7巻、老子」明治書院1966年10月30日刊、P27～29より引用。

4. (1) このように、言志四録を川上正光全訳注の講談社学術文庫で、「老子」を阿部吉雄・山本敏夫著の明治書院の新釈漢文大系でお読みになると、なぜ高井伸夫先生が「無用の用」の大切さを人々に訴えておられるのかがよくわかると思います。

(2) 後者は極めて詳細でこの上なくわかりやすい作品ですが、少し高価なので、図書館で御覧頂るか、蜂屋邦夫訳注の「老子」ワイド版岩波文庫、岩波書店2012年4月17日刊でお読みになることをお勧めいたします。

5. 最後に一言

(1) 高井伸夫先生の素晴らしさは、佐藤一斎の「言志四録」はじめ様々な古典に絶えず親しまれ、現代社会に最も必要なテーマを、古典のことばを通して示されることにあります。

(2) 高井先生は、「四書」、つまり「論語」「孟子」「大学」「中庸」など儒教だけでなく、「老子」など道教の考えにも精通し、人生にとり、また、リーダーを目指す人々にとり何が大切なかを優しく示してください。

(3) 論語や孟子も大切ですが、「無用の用」、「無の効用」など道教はその教えの中で最も現代が必要とするものと確信します。

(4) 最大の問題は、「言志四録」のような日本の古典や「老子」のような中国の古典を読み込むことなくリーダーを目指す人々が余りにも多いということです。

(5) 日本や中国の古典の深い理解ほど役に立つ勉強はありませんので、今からでも大いに学んで参りましょう。

— 2016年8月24日(水) 林明夫記 —